

## テスへの手紙1章「教会秩序の整え」

### 1A 真のわが子テス 1-4

1B 永遠の昔からの望み 1-2

2B みことばの宣教 3-4

### 2A 非難されることのない長老 5-9

1B 家庭を治める人 5-6

2B 神の家の管理者なる監督 7-9

### 3A 反抗的な者への戒め 10-16

1B 恥ずべき利益 10-11

2B クレタ人の言い回し 12-14

3B 不信仰による汚れ 15-16

## 本文

テスへの手紙に入ります。テスへの手紙は、テモテへの手紙にとっても似ています。テスは、パウロにとって、信仰による自分の息子でした。パウロの宣教にとって信仰に至りました。そして、テスもテモテと同じように、宣教の旅に同行しています。そして、テモテと同じように、パウロの代理として教会に遣わされています。そして、テモテと同じように、遣わされている教会では、諸々の問題があり、その問題を引き起こしている者たちも、似た問題を引き起こしています。

ですから、これまで学んできたことと、とても内容が似ていますが、分量としてはテモテへの手紙よりも少ないです。3章の分量しかありません。しかし、その分、主の教えがとてもコンパクトに、短く分かりやすく述べられています。例えば2章14節を読みましょう。「キリストは、私たちをすべての不法から贖い出し、良いわざに熱心な選びの民をご自分のものとしてきよめるため、私たちのためにご自分を献げられたのです。」パウロは、健全な教えとしてテスに伝えていることは、二つです。一つは、神の恵みの救いです。私たちの義の行いではなく、もっぱら神の憐れみによって、神が救ってくださいました。これが一つです。もう一つは、そのように救われた私たちは、良いわざに熱心になります。不法の業から贖い出し、良いわざに選び分けられたのです。これが健全な教えであり、テスへの手紙の中に、何度となく出てきます。

### 1A 真のわが子テス 1-4

1B 永遠の昔からの望み 1-2

<sup>1</sup> 神のしもべ、イエス・キリストの使徒パウロから。—私が使徒とされたのは、神に選ばれた人々が信仰に進み、敬虔にふさわしい、真理の知識を得るため、

当時の手紙は、今の手紙と違い、受け取る人の名前を書く前に、送り手、書き手の名を書き、自

分が誰であるかを、このように言い表します。パウロは、初めに、「神のしもべ」と言っています。モーセはダビデなども、神のしもべと呼ばれましたから、荣誉ある呼び名であります。それでも、自分は僕にしか過ぎないことを、初めに持って来てます。そして、「イエス・キリストの使徒」です。使徒とは、遣わされることです。主イエスに遣わされて、その権威をもって諸教会を建て上げます。

そしてパウロは、自分が使徒とされたことについて興味深いことを話します。「神に選ばれた人々が信仰に進み」と言っています。一人一人が、イエス・キリストに対する信仰に進むのですが、自分が進ませたのではなく、神の選ばれた者たちだけが信仰に進んだということです。一人一人が信仰を持つ前に、すでに神が選んでおられたということです。彼がコリントで宣教の働きをしていた時に、「この町には、わたしの民がたくさんいるのだから。(使徒 18:10)」と主が語られています。だから、恐れることなく、語り続けなさい、と命じておられます。すでに主が選んでおられるのです。その人たちが信仰に至ります。その人々がいるからこそ、私たちは反対や困難があっても、恐れることなく語り続ける、ということです。

そして、信仰に進むと、「敬虔にふさわしい、真理の知識を得る」ということです。私たちの信仰は真理に基づくもので、何でもいいから信じている信心深さによるものではありません。真理の知識が、それゆえ大事です。けれども、パウロがここで強調しているのは、「敬虔にふさわしい、真理」ということです。知識と称する人々の行いを見ても、そこに敬虔さがなければどうなるのでしょうか？それは、偽りであり、真理を知ったことにはならないのです。

<sup>2</sup> それは、偽ることのない神が永遠の昔から約束してくださった、永遠のいのちの望みに基づくものです。

この敬虔にふさわしい、真理の知識とは、何に基づいているか？を述べています。偽ることのない神が、約束された永遠のいのちの望みだということです。なぜ、偽ることのない神と表現しているかという、その望みが偽りではない、確かな望みなのだということです。神にはできないことがあります、それが偽ることです。神は全能であるから、できないことがあると言われるとびっくりするかもしれませんが、神はご自分の性質に反することを、することはできません。ですから、神が永遠のいのちの望みを約束しておられるのであれば、必ず、永遠のいのちに至るのです。

私たちは、この地上で歩んでいるのですが、永遠のいのち、つまり、かの世にある神の国にあるいのちを待ち望んでいます。ここで大事なものは、天の望みを抱いていて、地に足がつかないような生活をするようには召されていないことです。キリストは、天から遣わされて地に来られ、その中に住まわれました。しかし、地に属しておらず、天に属しておられ、それで天の栄光に戻られました。キリストの者とされた私たちも同じように、天に属していますが、この地上にしばらくの間、留まるように召されている旅人です。

そして、もう一つ興味深いことを、パウロが書いています。「神が永遠の昔から約束してくださった」ということです。神は永遠の昔から、私たちを選び、召し、そして永遠のいのちを持つように約束してくださっていたのです。神は、すべてのことを予め、すべてを初めから物事を整えて、すべてを相働かせて、ご自分の目的を果たしておられます。神に、「あらっ、これは知らなかった。間違っていたから、やり直すね。」ということはない、ということです。

## 2B みことばの宣教 3-4

<sup>3</sup> 神は、定められた時に、みことばを宣教によって明らかにされました。私はこの宣教を、私たちの救い主である神の命令によって委ねられたのです—

神は、永遠の昔から約束しておられた、永遠のいのちの望みを、パウロの生きていた時に明らかにすることを定めておられました。主が、長い年月をかけて、その時のために用意しておられたのです。イエス・キリストの福音が、もしアブラハムの時代に明らかにされたらどうなるでしょうか？ダビデの時代に明らかになるとしたら、どうなるのでしょうか？その福音の意味がまだ理解されることなく、宣べ伝えられることもなかったでしょう。パウロたちの生きていた時代だからこそ、宣教という手段によって広めることができたのです。モーセによって律法が与えられ、イスラエルの歴史が展開し、数多くの預言者が現れ、その中で、キリストの現れを待ちに待っていたからこそ、その意味していることを、知ることができたのだと思います。

そして、実際的なことを考えても、その時期に福音が宣べ伝えられることはふさわしいです。世界が、ローマ帝国という支配によって一つになっていました。すべての道はローマに通ずると言われるように、ローマに至る、数々のローマ街道が敷設されていました。そして、その支配下の全ての民が、ギリシア語を話しました。コイネ・ギリシア語と言いますが、これを語っていたので、福音宣教が通訳なしに、そのまま語ることが出来ました。

そして、パウロは、この宣教を、救い主である神の命令として委ねられていたと言います。ですから、パウロが選んでこの働きをしているのではないのです。命令されたのですから、もし福音を語らなければ、災いにあいます。コリント第一の手紙で、こう言いました。「I コリ 9:16 私が福音を宣べ伝えても、私の誇りにはなりません。そうせずにはいられないのです。福音を宣べ伝えないなら、私はわざわざいす。」

<sup>4</sup> 同じ信仰による、真のわが子テスへ。父なる神と、私たちの救い主キリスト・イエスから、恵みと平安がありますように。

宛先は、テスです。ここに「信仰による真のわが子」と書いているように、テモテと同じような親密な関係を持っていました。彼の宣教から信仰を持ったのでしょう。主から与えられた御霊の賜物が豊かであり、同労者であると同時に、パウロの信仰を十分に受け継いだ人です。

テスは、不思議にも使徒の働きで、その名が出てきません。けれども、パウロの手紙には数多く出てくる人です。テモテよりも先に、パウロの働きによって信仰を持っています。初めて、異邦人の信者が出て来た教会は、アンティオキアの教会です。そこで、テモテは信仰を持ったようです。ガラテヤ人への手紙 2 章によると、異邦人に割礼を強要しようとする割礼派と対峙して、それで、エルサレムに、バルナバと共に上っている話が出てきますが、その時に、「テスも連れて」と強調しています。なぜなら、3 節を見ますと、「私と一緒にいたテスさえ、ギリシア人であったのに、割礼を強いられませんでした。」とあるからです。テモテは、母がユダヤ人で父がギリシア人だったので、割礼をパウロが受けるようにさせましたが、テスは両親ともギリシア人でした。

そして、時は、第三次宣教旅行に飛びます。パウロがエペソに留まって、大きな神の働きがありました。彼の手ぬぐいを使っただけで、悪霊が追い出されるというような奇跡が起こっていました。しかし、そのような時に、コリントにある教会ではいろいろな問題が起こっていました。パウロは、先にテスを遣わしていました。パウロが、次の訪問をする前に、テスが何度かそこに訪問しています。そのやり取りが、コリント人への手紙第二にあり、テスの名が多く出てくるのです。

パウロは、トロアスに行って、そこでコリントから引き返して、テスに会おうと思っていたのに、予定通りになりませんでした。「Ⅱコリ 2:12-13 私がキリストの福音を伝えるためにトロアスに行ったとき、主は私のために門を開いておられました。私は、兄弟テスに会えなかったのに、心に安らぎがありませんでした。それで人々に別れを告げて、マケドニアに向けて出発しました。」パウロは、テモテがいなくて、心に安らぎが無かったとまで言っています。けれども、マケドニアに移った時に、テスに会うことが出来ました。そして、コリントの教会で何が起きているかをテスから聞いて、深い慰めを受けたと話しています(7:5-7)。

そして、パウロがコリントに到着する前に、さらにテスを前もって再度、遣わします。エルサレムにいる兄弟たちのための支援金を集めるためです(8:6)。パウロは、テスのことをこうコリントの人たちに進めています。「8:16-17 神に感謝します。私があなたがたのことを思っているのと同じ熱心を、神はテスの心にも与えてくださいました。彼は私の勧めを受け入れ、大変な熱意をもって、自分から進んであなたがたのところに行こうとしています。」

このようにして、テスは、パウロの福音宣教と諸教会への働きかけにおいて、最前線にいた人で、しかも、深刻な問題が起こっているところに、前もって遣わされていくという難しい使命を帯びていました。そして、テスがいなければパウロが気落ちするぐらいですから、彼は熱意があり、また、いろいろな目的を達成することのできる、力のある人だったに違いありません。

ところで、ここでよく見なければいけないのは、「同じ信仰による」とある「同じ」は、「共同の」と訳すことのできるギリシア語です。イエス・キリストについての教えについて、共同の信仰を持っているということですね。それぞれが、自分なりの信仰を持っていたのではなく、その信じていることが

一つであり、それを共同で分かち合っていたということです。私たちも同じですね、イエス・キリストについての教えがあり、それを信仰によって共同に分かち合っている集まりです。

それから、挨拶で「恵みと平安」とありますが、他の写本では、「恵みとあわれみと平安」となっています。テモテへの手紙でのパウロの挨拶と同じです。福音の働き人、教会の建て上げる者たちには、神の憐れみが必要だということです。自分の義の行いでは到底、成し遂げられません。いや、むしろ神の御怒りを受けても仕方がない、自分の圧倒的な罪深さを覚えます。神の憐れみがあつてこそ、前に進むことができます。

## 2A 非難されることのない長老 5-9

挨拶が終わり、次に本題に入ります。

### 1B 家庭を治める人 5-6

<sup>5</sup> 私があなたをクレタに残したのは、残っている仕事の整理をし、私が命じたとおりに町ごとに長老たちを任命するためでした。

テモテが今いるのは、クレタ島です。パウロも共にいたのですが、テモテを置いて、他のところに動きました。クレタ島は、ギリシアの半島の南にある、今のギリシアの中で最も大きな島です。使徒の働きで、この島の名が出てきます。パウロが囚人として船に乗っていて、クレタの島影を使って航行していたのを思い出してください。「良い港」に着いたのですが、パウロの助言を振り払って、そこから、クレタ島の別の港に行こうとしました。その時に、ユーラクロンという暴風が吹いて来て、その船がほとんど遭難してしまったという話です。そのクレタ島に、おそらくは、パウロがローマに行つてそこで獄中に入って、そこから釈放された後に、再び訪れたのではないかと思います。第一回目の投獄です。その後で、パウロはいろいろなところに宣教の働きに出ています。

そして、そこでパウロがテモテに任せたのは、「残っている仕事の整理」です。整理という日本語から、何か荷物の整理のような、事務的な処理を連想してしまうと思います。けれども、ギリシア語は、「秩序正しくする」という意味合いを持っています。長老たちを町ごとに任命するということなので、教会全体の秩序を正しくするということでしょう。福音宣教がクレタ島でかなり広がったと思われる。そして、人々は集まっているのですが、そこに秩序が欠けていました。クレタ島には、悪い習慣がありました。また、ユダヤ人の律法主義を教える者たちも入り込んでいます。その中で、必要なのは平和と秩序です。平和と秩序の中で、人の魂は安心します。平和と秩序の中で、人は初めて霊的に成長します。パウロは、テモテへの第一の手紙で、上に立つ人々のために祈るのは、「私たちがいつも敬虔で品位を保ち、平安で落ち着いた生活を送るため。」と言っていました(2:2)。

そこで大事なものは、当然ながら、教会の指導者が立てられることが急務です。教会は、キリストがかしらとなっているからだとす。確かに、キリストがかしらとなっているために、キリストご自身が

賜物を与え、教会に指導者をお立てになります。そのことによって、キリストが確かにかしらであるように、すべてのことに渡って、キリストが支配しておられる状態、環境が教会の中に与えられます。そこにいる各々が、そのような秩序と平和の中で、キリストご自身に取り組むことができ、この方に向かって霊的に成長できるのです。

<sup>6</sup> 長老は、非難されるところがなく、一人の妻の夫であり、子どもたちも信者で、放蕩を責められたり、反抗的であったりしないことが条件です。

長老と、次に出てくる監督は、同一人物であることが多いです。どの側面が強調されているかで呼び名が変わりますが、長老は、霊的な成熟と威厳を言い表している言葉です。そこで、パウロが大事にしているのは、自分の家庭で威厳をもって治めているかどうか？であります。

テモテへの第一の手紙にもあった監督に対する資格ですが、一人の妻の夫です。当時は一夫多妻制もあったのですが、イエス様が言われた、元々、男と女を神が一つに結び合わせたのであって、長老は、その基準の中に生きている人が求められます。それから、子どもたちが信者であるということです。家庭の中に秩序があるのは、それぞれがみなイエス様を自分の主としていることがありますね。そして、放蕩をしていない反抗的ではないということも条件にしています。

今の教会で、必ずしもこの条件に合わないという現状もあることでしょう。子どもの信仰については、長老本人がどうしてもできない領域であると思います。けれども、大事なものは、主にあって子どもを教育しているのかどうか？が問われます。おそらく、クレタ島では、そういったことも知られていなかったと思います。子どもは子ども、私たちは教会を建て上げます、ということではないのです。

## 2B 神の家の管理者なる監督 7-9

<sup>7</sup> 監督は神の家を管理する者として、非難されるところのない者であるべきです。わがままでなく、短気ではなく、酒飲みでなく、乱暴でなく、不正な利を求めず、<sup>8</sup> むしろ、人をよくもてなし、善を愛し、慎み深く、正しく、敬虔で、自制心があり、

長老が霊的成熟や威厳が強調されているのに対して、監督はその呼び名のごとく、神の家を管理する側面の強い呼び名です。

その資格ですが、長老と同じく筆頭に挙げられているのが、「非難されるところのない者」です。これは、証拠や証言がある中で、明らかに過ちがあることを意味します。誰かの主観で、この人には非があるというものではありません。テモテ第一 5 章で、「長老に対する訴えは、二人か三人の証人がいなければ、受理してはいけません。」とありましたね(19 節)。悪意や敵意を抱いていれば、「坊主憎けりや袈裟まで憎い」という言葉があるように、何でもかんでも非難することができます。そして事実、そうやってパウロはコリントの教会で、あることないこと、いろいろな批判と非難を

受けていました。これは、自分の心の狭さから、相手を公平に冷静に見ることのできない、幼さの表れです。

そして、その非難されることがない特徴ですが、第一にわがままでないということです。わがままな人が教会を治めると、すべてがその人中心に回ってしまいます。そして短気ではないということです。喜怒哀楽は、人であればだれもが持っていますし、イエス様もお持ちでした。けれども、それを御霊によって感情に対して自制心を持っているかどうかであります。人の前に立つ人には、特にこの特性が必要です。それから、酒飲みではない、乱暴ではないということです。不正な利、つまりビジネスの取引で、ごまかすようなことをしていないということです。わがままから、不正の利まで、すべて一つの流れがあります。クレタ島では、いろいろな人が教会にいて、そういった霊的に未熟な人たちも多かったものと思われまます。

そして 8 節からは、積極面です。第一に、人をよくもてなします。教会に新しい人が来ているのに、また誰かが話したい、祈ってもらいたいと思っているのに、それらを避けているような人は監督になってはいけません。そして、善を愛します。何か良くしてあげたいと願う人です。そして、慎み深いとあります。自分に与えられた分を越えて、何かを敢えてしようとしなない、言わない、という慎重さです。そして、正しいとありますが、神との関係においても、人との関係においても、正しさを求めます。そして、敬虔は神を恐れ敬い、従う態度です。それから、先ほど話した自制心ですね。

<sup>9</sup> 教えにかなった信頼すべきみことばを、しっかりと守っていなければなりません。健全な教えをもって励ましたり、反対する人たちを戒めたりすることができるようになるためです。

8 節にある、神への敬虔、人へのもてなしが備わっていて、教えにかなった信頼すべきみことばを、しっかりと守っているということです。「教え」というのは、使徒たちによって教えられたという意味合いのものです。エルサレムで弟子たちに聖霊が降り、教会が生まれましたが、「彼らはいつも、使徒たちの教えを守り」とあります(2:42)。教会における活動は、使徒たちの教え、すなわち旧約聖書に基づいて、使徒たちが教えたこと、つまり新約聖書です。聖書で何が語られているか、その教えをしっかりと守ることです。ですから、私たちの教会では、他のカルバリーチャペルの教会と同じように、礼拝の中心に、聖書を順番に教える説教が中心になっています。

ここで大事なものは、その教えがあつて、それで良いわざに励んでいくというつながりです。また、良いわざの中で、教えを聞いていくということもあるでしょう。順番はともあれ、敬虔さと、教えが直結していることです。教会では、聖書の教えは教え。けれども、それとは別のこともやりたい、という願いを持っている人々もいます。聖書の教えは知識としてあったらいいけれども、私はこのことをしたい、あのことをしたいという、隠れた動機を持っているのです。そうすると、知識は知識として増大していきますが、学んでいるだけで、実が結ばれません。落ち着いた平和な生活にならず、次に出てきますが、家から家へ、教会から教会へ渡り歩くような人になってしまいます。

それが教会は、そういったところではありません。自分のしたいことをするのではありません。良い教えを聞き、それを良い行いに消化していく実践の場です。互いの中で実践し、それから、今、自分の置かれている生活で実践するのです。

そして、「健全な教えをもって励まし」ことを行います。健全であるとは、健康とあるように、人に成長をもたらします。そして人の思いの汚れの部分がない、清さを保っています。教えが健全であることが、非常に重要です。パウロが、テモテに、「自分自身にも、教えることにも、よく気を付けなさい。」と言っていました(Ⅰテモ4:16)。そして、健全な教えだからこそ、人々を励ますことができます。そして、従順な人たちであれば、励ましを受けますが、反抗する心がある時には、戒めることができます。威厳をもって、権威をもって、健全な教えに適わないことを思ったり、発言したり、行ったりしている人たちには、戒めるのです。

### **3A 反抗的な者への戒め 10-16**

#### **1B 恥ずべき利益 10-11**

<sup>10</sup> 実は、反抗的な者、無益な話をする者、人を惑わす者が多くいます。特に、割礼を受けている人々の中に多くいます。

テモテが監督であったエペソと似たような状況が、クレタ島にもありました。第一に、「反抗的な者」ということです。パウロたちが、教会に秩序と平和が与えられるように努めていたのに対して、そうでないことを求めている者たちです。次に、「無益な話をする者」であります。神のみことば、教えにはない、関係のないことをあたかも大事であるかのように語っていく人々であります。そして、「人を惑わす者」です。サタンが人を惑わす者ですが、同じように、人を偽りに誘い込み、罪を犯させたり、無益なことに取り組ませたりします。

「特に、割礼を受けている人々」と言っています。ユダヤ人にさせて行こうとする者たち、ユダヤ主義者らです。律法をことさらに強調して、神の恵みによる救いをないがしろにする者たちです。律法を掲げていながら、肉に対して何ら力を持っていない者たちです。

ところで、神の教会で、反抗する者たちは、大体、自分たちの隠れた主張があります。自分たちこそが、正しいことを信じているとして、教会を批判します。秩序と平和を求めるのではなく、言葉による争いを好みます。何か聖書からどこかを取り上げて、あたかも霊的なように、敬虔なように見せるのです。そこには、恵みによる神の義がありません。自分の義なのです。しかし、自分の義など不潔な着物にすぎません。必ずぼろがでます。肉の行いが出ます。正しさを主張しながら、ことごとく悪い行いで、その言っていることを否定しているのです。

<sup>11</sup> そのような者たちの口は封じなければなりません。彼らは、恥ずべき利益を得るために、教えるはならないことを教え、いくつかの家庭をことごとく破壊しています。

テトスがしなければいけないのは、そのような者たちを語らせないということです。発言権を持たせないということです。それは、ただ禁じればよいものではありません。しっかりと、非難されるところのない長老また監督を立てて、信頼すべきみことばをしっかりと守らせて、健全な教えで励ますという態勢が整っていないといけません。その中で、そういった発言がいかにかしいかを、自然に明らかにされるようにしないといけません。

そういった者たちの目的は、「恥ずべき利益」です。金銭的な利益もあるでしょうし、知名度もあるでしょう。自分の支配下に置きたいという支配欲もあるかもしれません。そうした恥ずべき利益のためには、手段を選びません。教えてはならないことを教えるのです。聖書にある健全な教えから、離れたことを、勝手に作り出して教えるのです。

そして、「いくつかの家庭をことごとく破壊しています」とあります。どのようなことを教えていたのか分かりませんが、テモテへの第二の手紙には、家々に入り込み、愚かな女たちをたぶらかして、様々な欲望に引き回されて罪から罪を重ねている、とあります。情欲もあるでしょう、金銭欲もあるでしょう。何か多くのプログラムで知識は身に付けさせているのですが、全く敬虔に生きることにつながらない教えです。

私は、ある方があるキリスト教のグループに入ったことによって、夫婦の仲が危機的な状況に陥ったという話を読みました。旦那さんもクリスチャンなのです。その危機的な状況こそが、何かがおかしいと気づいたきかけだったそうです。

## 2B クレタ人の言い回し 12-14

<sup>12</sup> クレタ人のうちの一人、彼ら自身の預言者が言いました。「クレタ人はいつも嘘つき、悪い獣、怠け者の大食漢。」

クレタ人の預言者とは、神学者ヒエロニムスによると、ギリシアの賢人エピメニデスではないかと言われています。当時のクレタ人の特徴がこのようなものだったのでしょう。キリスト者になったと言っても、まだ霊的に成長できていない時に、こうした性質が多分に残っていたのでしょう。そして、こうした性質に付け込んで、教会の秩序を乱している輩が一部にいた、ということでした。

それぞれの国や人々に文化や習慣がありますが、それに付け込んで悪さをする者たちがいるので、気を付けないといけません。日本であれば、恨みの文化ですが、赦しとかけ離れているので、これは避けなければいけません。ところが、恨みを利用して、いつまでも赦さないようにさせていく悪い働き人がいます。被害者意識の中に留めさせて、いつまでも攻撃的にさせます。

<sup>13</sup> この証言は本当です。ですから、彼らを厳しく戒めて、その信仰を健全にし、<sup>14</sup> ユダヤ人の作り話や、真理に背を向けている人たちの戒めに、心を奪われないようにさせなさい。

テトスは、難しい働きに付いています。テモテもそうでしたが、彼は臆病になっていたもので、パウロは何度となく、励ましました。それは、厳しく戒めることですね。そうしたことはしてはいけない、教えてはいけないとはっきりということです。汚れているとして、信仰を清めさせます。健全にさせます。そして、真理に導くのです。ユダヤ人の作り話とは、いろいろな聖書にない教えに取り組みます。そして、いろいろな規則を持ち込み、それを行わせるのです。これこれを食べてはいけないと教えたりします。また、結婚をしてはいけないとか、すでに信仰によって清められたのに、再び空しい戒めで清めと義を達成させようとしていたので、心を奪われないようにさせます。

### 3B 不信仰による汚れ 15-16

<sup>15</sup> きよい人たちには、すべてのものがきよいのです。しかし、汚れた不信仰な人たちには、何一つきよいものはなく、その知性も良心も汚れています。

パウロは、イエス様が、人を汚すのは内側からで、外側からのものは排泄するという教えを、しっかり保っていました。「I テモ 4:4-5 神が造られたものはすべて良いもので、感謝して受けるとき、捨てるべきものは何もありません。神のことばと祈りによって、聖なるものとされるからです。」私たちは、福音の真理によって、信仰によって清められるということから離れて、「これこれをしてはならない、さもないと汚れる」として教えることは、避けなければいけません。一人一人の良心にしたがって、任せればよいのです。それぞれが確信をもって、主に対して守ればよいのであって、それを他の人に教えたり、裁いたりしてはいけないのです。

大事なものは、信仰なのです。恵みによる救いと、御霊による、信仰による清めから離れていれば、その人は不信仰であり、どんなことをやっても、清くないのです。知性も良心も汚れているとパウロは断言しています。取り組んでいる焦点がずれています。

<sup>16</sup> 彼らは、神を知っていると公言しますが、行いでは否定しています。彼らは忌まわしく、不従順で、どんな良いわざにも不適合です。

午前礼拝で学んだところですね。神を知っていると知っているのですが、それは知識だけで、その知識が行いに行かされていないのです。知識を知識のために行っています。そして異なる動機、汚れた動機があるのです。恥ずべき利益を求めているのです。その神の知識が、行いの実によって、果たして真の知識なのかを試されます。

そして、公言だけして行いで否定している者は、教会に対してつまずきを与えます。それこそが、忌まわしく、不従順で、不適合なのです。世における汚れは、当たり前です。けれども、教会における忌まわしいことは、敬虔を装って、実はそうではないものを持ち込むことです。バラムの教えがそうであると、午前礼拝で学びました。2章で、敬虔にかなう教えについてじっくりと見て行きます。